

# 復讐

夢野久作

青空文庫



昭和二年の二月中旬のこと……S岳の絶頂の岩山が二三日灰色の雲に覆おおわれているうちに、麓ふもとの村々へ白いものがチラチラし始めたと思うと、近年珍らしい大雪になった。

その麓のS岳村から五六町離れた山裾やますそに、この界限かいわいでの物もの持もちと云われている藤沢病院が建っていた。田舎いなかには珍らしい北歐型のスレート屋根を、古風な破風造りの母屋おもやの葺いらかと交錯さして、日が暮れても、ハッキリとした輪廓りんかくを、雪の中に描き現わしていたが、やがて、その玄関の左右から明るいのと、暗いのと、二いろの電燈が輝き出した。

向って右側の明るい窓は、この病院の薬局で、二段重ねの薬戸

棚に囲まれた中央の調合台の前には、この家の養女として育つて来た品夫しなのおが、白い看護婦服を着て、キッチンと腰をかけていた。彼女の前のセピア色の平面には、きょう出された処方箋や、薬品の注文の写しや、新薬のビラの綴とじ込みや、カード式の診断簿等というものが、色々の文房具や、薬品などと一緒に一パイに取り散らしてあつた。

彼女の皮膚はだは厚化粧をしているかのようになつた。その頬と唇は臙脂べにをさしたかのように紅く、その睫まつげと眉は植えたもののように濃く長かつた。髪かみのけも毛けも同様に、仮髪かつらかと思われるくらい豊かに青々としているのを、皆めじりが釣り上がるほど引き詰めて、長い襟足の付け根のところに大きく無造作に渦巻かせていた。そうし

て、しなやかな身体からだを机に凭もたせかけながら、切れ目の長いひとえ一重瞼まぶたを伏せて、黒澄んだ瞳を隙間すきまもなく書類の上に走らせるのであったが、その表情は、ある時は十二三の小娘のように無邪気に、又、ある瞬間は二十四五の年増女としまおんなのようにマせて見えた。又ある時は西洋の名画に在る聖母のように気高く……かと思うと、その次の刹那せつなには芝居の毒婦のように妖艶にも……。

彼女はホントウに忙しいのであった。

近いうちに彼女と式を挙げる筈はずになっている藤沢家の養子で、前院長の甥おいに当る健策という医学士は、昨年げんよの暮に、養父の玄洋う氏が急性肺炎で死亡すると間もなく、大学の研究を中止して帰って来たのであったが、なかなかの元気で、盛んに広告をし

て患者を殖やす上に、何から何まで大学式のキチヨウメンな遣り方をするので、その忙しさといったら無かつた。その中でも薬局と会計の仕事だけは、他人に任せない家風だったので、前の院長の時から引き続いて、品夫がタツタ一人で引き受けているのであったが、田舎の女学校出の彼女にとつては、独逸語ドイツの処方箋を読み分ける事からして容易ならぬ骨折りで、寧ろ超人間的の仕事といつてもいい位であつた。

しかし、そのうちに彼女はヤツト仕事を終つた。新薬の広告ビラを板の上に綴じ付けて、会計簿の上にキッチンと置くと、ホツと溜息をしながら眼をあげて、正面の薬戸棚の間に懸かっている大きなボンボン時計を見た。その瞬間に時計は、彼女のこの上もな

い親切な伴侶でもあるかのように、十一時の第一点を打ち出した。

その音が鳴りおわるまで彼女は、机の上にあらわな両腕を投げ出して、ウツトリと眼を据えていた。唇をすこし開いたまま……  
そうして時計の音が一つ一つに室の中を渦巻いて、又、もとの真んちゆうんちゆう  
鍬くわの振り子の蔭に消え込んでしまうと、彼女は頭を使い切つてしまった人のように、両手を顔に当ててグツタリとなつてしまつた。

けれども、それはホンの一分か二分の間であつた。……どこか隔たつた室で話しているらしい男の声が、廊下に面した扉ドアの間からホソボソと沁しみ込んで来るうちに……

……品夫……

……復讐……

……という二つの言葉が偶然のように相前後してハッキリと響いて来ると、彼女はパツと顔を上げた。アヤツリ人形のように正面を見据えて、何ともいえない怯<sup>おび</sup>えた表情をしながら、全身をヒツソリと硬<sup>かた</sup>ばらせたようであつたが、やがて大急ぎで足下の反射ストーブを消して、頭の上にゆらめく百燭<sup>しよっこう</sup>光のスイッチを注意深くひねると、真<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>になつた薬戸棚の間を音もなく廊下に<sup>すべ</sup>迂<sup>すべ</sup>り出た。やはり真暗な玄関を隔てた向側に在る、患者控室の扉<sup>ドア</sup>に近づいて、ソツト鍵穴に眼を当てた。

患者控室は十畳ばかりのリノリウム張りであつた。そのまん中

には、薄暗い十燭の電燈がブラ下がっていたが、その下に据えられた大火鉢またびに近く、二人の男が長椅子を引き寄せてさし向いになりながら股火またびをしているのであった。

ドア扉に背を向けているのは若い院長の健策で、糊のりの利いた診察服の前をはだけて、質素な黒羅紗らしゃのチョッキと、ズボンズボンを露わしている。背丈はあまり高くないが、その胸高に組んだ逞ましい腕や、怒った肩や、モシヤモシヤした頭や、健康そのもののように赤光りする顔つきは、まだ純然たる書生型タイプで、院長らしい気取った態度は微塵みじんもない。ウツカリすると柔道かボートの現役選手に見られそうな風采である。

これに反して向い合った男は、蒼黒く肥った、背の高い、堂々

たる風采のイガ栗頭であつた。四十代に見える、鼻すじの通つた貴族的な顔に、ロイド式の大きな黒眼鏡をかけて、上等の駱駝らくだの襯衣シャツを二枚重ねた上から、青縞の八反の襜褕どてらを着ているが、首のまわりにクツキリと白くカラのあとが残つているのが何となく意気に見える。……もう久しく……正月の初め頃から、この病院の特等室に寝起きしている、黒木繁という患者で、元来歐洲航路のカーゴボートの一等運転手であつたのが肺はいせん尖わづらを患つた揚句あげく、この病院の新聞広告を見て静養しに來たものだそうである。東京育ちと名乗るだけに、金づかいが綺麗なばかりでなく、物ごしが上品で、見聞が広いために、いつとなく若い院長と懇意になつて、無二の話相手にされているのであつた。

二人の間にプープーと湯気を吹いているアルミの大薬罐おおやかんや、外の雪をチラチラと透かしながら一面に水滴しずくをしたたらしめている硝子窓ガラスは、二人が長い間話し込んでいる事を証明していた。しかも、その話の興味はかなりに高潮しているらしく、健策は長椅子に背を凭もたせて、冷然と腕を組んだまま……又、黒木はその黒眼鏡をかけた魚のように無表情な顔を、火鉢の上にさし出したまま、双方睨み合いの姿で、緊張した沈黙に陥っているのであったが、やがて、黒木が固く結んでいた唇を開くと、相手の顔を見詰めたまま、長い溜息を一つした。そうしてポツツリと独言のように、

「……復讐……」

と云った。すると健策は、その言葉を待ちかねていたかのよう

に大きく、一ツうなずいた……が、間もなく何かしらパツと赤面しながら微苦笑を浮かべた。

「……そうなんです……品夫は親の讐敵かたきを討ちたいから、今暫しばらく結婚を延期してくれと云うのです。……あんまり馬鹿馬鹿しい云い草なので、実は僕も面喰っているのですがね……ハハハハハ」

黒木はしかし笑わなかった。なおも健策の顔を凝視しながら、  
躊躇ちゆうちよしいしい問うた。

「……へエ……しかし、それには何か深い理由わけがおりになるでしょう?」

「ええ……それは、あるといえは在るようなものです。貴方あなたのように世間を広く渡っておられる方に、その理由わけというのを聞いて

頂いたら、何か適当な御意見が聞かれはしまいかと思つて、実はお話しするんですがね……ほかに相談相手も無いしするもんですから……」

「へエ……私で宜しければですが……しかし、そんな立ち入った事を……」

「構いませんと……誰も聞いている者はありませんから……ほかでもありません。……今もお話しする通り、品夫と僕の事は、死んだ養父ちちの玄洋が、もうズツト前から決定とりきめていましたので、親類連中とも話し合つて、去年の暮に式を挙げるばかりになつていたのが、養父ちちの病気でツイ延び延びになつてしまつたんです。……それで、養父ちちが亡くなりますと、正月の十一日でしたが……

三七日の法事の時に、親類たちと相談をしまして、四十九日の法事が済んだら、間もなく式を挙げる事に決定したのですが、それを品夫が聞きますと、意外にも、頑強な反対論を持ち出しましてね……今までは別に異存も無いらしかったのですが……」

「へエ……妙ですな。それは……」

「エエ……妙なんです……。つまり養父ちちの百箇日ちちが来るまで遠慮したいと云うので……。そのうちには品夫の実父の二十一回忌も来るしする事だから、そんな法事をスツカリ済ましてから、ゆつくりと式を挙げたいと云うのです」

「成る程……それなら御無理もないかも知れませんね……。初うぶなお嬢さんは何となく結婚を怖がられるものですから」

健策は又も耳のつけ根まで赤くなった。

「……エエ……それは僕も知っています。しかし、そういう品夫の態度が恐しく真剣なので、僕はすこし気にかかりましてね。何となくトンチンカンな感じがしましたから……その時にこう云ってやったのです……。それは一応<sup>もつと</sup>尤もな意見だが……しかし、もう親類と相談をしてきめてしまった事だから、今変更するのは面白くないだろう……と……」

「なるほど……これも御道理<sup>ごもつとも</sup>ですね」

「そう云いますと、今度は品夫の奴がメソメソ泣き出して、ウンともスンとも返事をしなくなつたんです」

「へエ……なるほど……」

「……様子が変ですから僕はいよいよ気になりましたね……何故泣くのかと云つて無理やりに、根掘り葉掘り尋ねますと、やつとの事で白状したのです。……つまり妾は、二十年前に殺された、妾の实のお父さんの讐敵かたきを討たなければ結婚をしない決心だと云うので……イヤもうトンチンカンにも、時代錯誤にも、お話しにならない奇抜な返答なのですが、本人はそれでも頗る付きの大真面目らしいので、僕はスツカリ面喰つてしまいました」

「へエ……それは……お驚きになったでしょう……」

「イヤもう、お話しするのも馬鹿馬鹿しい位ですがね……ですか  
ら僕も、始めは何かしら云い難い理由わげがあるのを隠すために、そんな無茶を云うのじゃないか知らんとも思つてみたんですが、品

夫の真剣な態度を見ると、どうもそうじゃないらしいんです……  
というの、元来品夫は僕と違って文学屋で、女の癖に探偵小説  
だの、宗教関係の書物だのを無闇矢鱈むやみやたらに読みたがるのです。露西ロシ  
亜人アが書いたとかいう黒い表紙の翻訳小説を取り寄せて、夜通し  
がかりで読んだりする位で……ですから、そんなものの影響を受  
けているのでしよう。ごく平凡なつまらない事までも、恐ろしく  
深刻に考え過ぎる癖があるのです。……それで、こんな事を空想  
したんじゃないかと気が付いたのですがね」  
「ハハア……成る程……それはそうかも知れませんが……しか  
しそれにしても妙ですナ。品夫さんのお父さんは二十年も前にお  
亡くなりになったので、顔もよく御存じ無い筈なのに、どうして

そのお父さんの讐仇かたきの顔を見分けられるのでしよう」

「それが又奇抜なんです。品夫はその実父ちちおやを殺した犯人が生きてさえおれば、一生に一度はキットこの村に帰って来るに違い無いと云うのです。何故かと云うと或る犯罪者あが、自分の犯した罪悪の遺跡を、それとなく見てまわったり、それに関する人の噂を聞いたりすると、トテモたまらない愉快を感じるものだと云うのです。つまり自分の罪を人知れず自白してみたい一種の心理と、犯罪者特有の冒険慾とが一所になって来るので、トテモ正しい人間の想像も及ばないスバラシイ魅力を持っているものだそうで……つまり、その犯した罪が大きい程……そうして犯人自身が知識階級であればある程、その魅力も何層倍の深さに感ぜ

られるものだと言うのです。……だから妾のお父様を殺した犯人は、ツイこの頃までも、そうした大きい魅力に引かされて、この村に帰ってみたくて堪らないでいたに違い無いが、ここにタツタ一人、その犯人の顔や特徴をよく知っておられる、うちの御養父様が生き残っておられた。……それでウツカリこの村に足を入れる事が出来ずにいたのだが、その御養父様がお亡くなりになった今日では、モウ怖い者は一人も居ないのだから、その犯人はスツカリ安心しているにちがいない。そうして近いうちにこの村に遣つて来るに違い無い……イヤ……事によると、もうそこいらに来ていて、妾の姿をジロジロ眺めているかも知れない……と云うので、恰で夢みたような事を主張するのです……しかも真剣に……」

熱心に傾聴していた黒木は今一度、長いため息をした。やはり相手の顔をみつめたまま……。

「成る程……婦人の想像力ぐらい恐ろしいものはありませんからね……真実以上の真実ですから……」

「……まったくです……しかし、その時はちょうど僕も品夫も、

新規に引き受けた病院の仕事だの、遺産の整理だの、法事だのというものがゴチャゴチャと重なり合っていて、トテモ結婚どころの沙汰じゃなかったもんですから、そんな事を深く穿鑿せんさくする暇も無いままに放ほつたらかしておいたものですが……そうそう……

それから品夫はコンナ事も付け加えて話しましたよ。何でもそれから二三日目の夕食の時でしたが、顔を赤くしながら……妾わたしはこ

のあいだ御養父様おとうの二七日の晩に、妾の身の上とソツクリのコルシカ人の娘の話を読んで心から感心してしまった。その娘は、父親を殺したに違い無いと思つてゐる男から婚約を申し込まれると、大喜びで直ぐに承諾をして、他からの申込みを全部断つてしまつた。そうして結婚式の晩にその男を絞め殺す……という筋であつたが、その中には、そうした自分の罪の遺跡に引きつけられつつ、犯罪を二重に楽しんで行こうとする犯人の気持ちと、その犯人のそうした執念深い慾望をキレイに断ち切つて終うかどうかしなければ、どうしても気が済まない、生一本きいっぽんの娘の心理とが、タマラナイ程深刻に描きあらわしてあつた……と云うのです。何でも品夫はその小説を読んでから、そんな氣になつたのじゃないかと

思うんですが……」

「ハハア……」

と黒木はイヨイヨ感動したらしく、片手で鼻の下を撫でおろした。

「……フランスフ랑스か伊太利イタリー物らしい小説ですな。……けれども万に一つその通りになったら、お嬢さんは、トテモ素晴らしい直感力を持つておられる訳ですね」

健策も苦笑しながら、ツルリと顔を撫でまわした。

「どうも赤面の至りです。あんまり非常識な話なので……」

「……イヤ……しかし驚き入りましたナ。……実は私も品夫さんのお父さんに関する村の人の噂を二三聞いているにはいたのです

が、大部分誇張だろうと思いましたが、もしかすると岡焼き連の中傷かも知れないと思いましたが、今の今までチツトも信じていなかったのですが……」

「イヤ……村の者の噂は大部分事実なのです。品夫はたしかに氏素性のハッキリしない者の娘で、しかも変死者の遺児に相違無いのです。つまり、その犯人が捕まらないために、何もかもが有耶無耶に葬られた形になっているので……」

「ハハア。……してみると所謂迷宮事件ですな」

「そうなんです。品夫の父親が殺された事件は徹頭徹尾、迷宮でおしまいになっているのです。何しろ二十年も昔の事ですから、警察の仕事もいい加減なものだったでしょうし、おまけにこんな

片田舎の高い山の上で行われた犯罪ですから、たしかな証拠などは一つも掴まれなかったらしいのです」

「成る程。しかし物的の証拠は無くとも、心的の証拠は何かあった訳ですね。犯人が仮想されていた位ですから……」

「それはそうです。その当時はたしかにそれに相違無いという犯人の目星がついていたのですが、今となつては、その犯人が捕まらないために、事件全体が五里霧中の未解決のままになっているのです。……ですから、そんなところから色々な噂も起つて来るでしょうし、品夫も亦またソナ事を探偵小説的に考え過ぎた結果、飛とんでもない空想を抱くようになったのじゃないかと想像しているんですがね……あなた貴方の御意見はどうだか知りませんが……」

「……そうですね……それはそうかも知れませんが……。しかし何しろ私も、そんな噂話があるという事を、看護婦を通じて聞いただけですから、シツカリした考えは申上げかねるのですが……」

「……成る程……それじゃその事件のあらましかけを、今から掻かいつまんでお話してみましようか。その時に立ち会った養父ちちの話ですから、村の噂などよりもズツト正確な訳ですが……聞いてくれますか貴方は……」

「……へエ。それは是非伺いたいものですが……。しかし……御承知の通り私は、すこし興奮すると、すぐに睡ねむれなくなる性質たちなので、それに時間も遅いようすし……」

「……イヤ。まだ十時位でしょう。眠れなかつたら、あとで散薬

か何か上げますから、それを服のんだらいいでしょう。もう本当は退院されてもいい位に恢復しておられるのですから、一ひと晩ぐらい夜更かしをされても大丈夫ですよ……僕が請け合います……」

「アハハハハ……イヤ。散薬なら二三日前に頂ちようだい戴だいしたのがまだ残っています……」

「そうして適当な判断を下してくれませんか……品夫が外国の探偵小説にカブれて、そんな事を云い出したものか、それともほかに何か理由わけがあつての事か……どうかというような事を……」

「ハハハハハ……ドウモそう性急に仰おっしゃ言んつちや困りますがね。

……婦人の心理というもの是要するに、男にはわからない物ださうですから……」

「まったくです。全然不可解なんです」

「アハハ……イヤ……私も無論、御同様だろうとは思いますが……それじゃ、とにかくその事件の成行なりゆきというものを伺った上で、一ツ考えさして頂きますかね」

「どうか願います……こうなんです。……品夫の父親というのは今から三十年ほど前に、親父ちちの玄洋が、この村の獣医として東京から連れて来た、実松さねまつ源次郎という男で、死んだ時が四十いくつとかいう事でした。生れは東北のC県で、T塚村という大村の、実松家という富豪の跡取息子だったそうですが、どうした理由わけか、故郷に親類が一人も居なくなつたので、田地田畑をスツカリ金に換えて上京したものだそうです。そうして獣医学校に籍を置

いて勉強しているうちに、同じ下宿に居た関係から私の養父ちちの玄洋と懇意になつたのだそそうで……」

「ハハア。チョット……お話の途中ですが、その故郷の親類が一人も居なくなつた理由わけというのは、今でもやはり、おわかりになつていないのですね」

「そうです。何故だかわからないままになつて居るのです……しかしタツタ一人その源次郎氏の甥おいというのが残つていたそうです。たしかに源次郎氏の姉の子供だと聞きましたが、それが、実松当九郎といって、この事件の犯人と眼指めざされている二十二三歳の青年なんです。尤も今は四十以上の年輩になつて居る訳で、ちようど貴方位の年とし恰好かつこうだろろうと思われれるのですが」

「ハハア。どんな風采の男か、お聞きになりましたか」

「スラリとした色の白い……女のよ様な美青年だったそうです。何でもズット以前から叔父の源次郎氏に学費を貢いでもらって、東京で勉強していたけれども、不良少年の誘惑がうるさいからこつちへ逃げて来たという話で……そうしてこの病院の加勢をしなから開業免許を取るといので、村外れの叔父の家から毎日通っていたそうですが、頭のステキにいい、何につけても器用な男で、人柄もごく溫柔おとなしい方だったので、養父ちちの玄洋が惚れ込んでしまつて、うちの養子にしようかなどと、養母ははに相談した事も、ある位だったそうです」

「ハハア。玄洋先生は余程開けたお方だったのですな」

「そうですね。養父はどつちかと云えば人を信じ易い性質だった  
のでしよう。品夫の実父の源次郎氏の事なども、獣医には惜しい  
立派な人物だと云つて賞め千切つていたようですが、よく聞いて  
みるとそれ程の人物でもなかつたようで、こんな村の獣医相当の  
人間だつたのでしよう。一見して変り者に見える、黙り屋の無愛  
想者だつたそうで、友達なども養父の玄洋以外に一人も無かつた  
そうです。……趣味といつては唯銃獵だけだつたそうですが、こ  
れは余程の名人だつたらしく、十年ばかり居る間に、S岳界隈の  
山の案内は、所の獵師よりももっと詳しく知り尽していたという  
事で……気が向くと夜よなかでもサツサと支度して、鉄砲を荷い  
で出て行くので、あくる朝になつて家の者が気が付く事が多い……

…そうして帰つて来ると、いつもこの上なしの上機嫌で、その獲物を着さかなに一パイ飲やりながら、メチャメチャに妻君を熱愛するのが又、近所合壁がつべきの評判になつていたそうですがね。ハハハハハ。しかし、さもない時には、気が向かない限り、どこから迎えに来ても断つて、酒ばかり飲んで寝ころんでいるといった調子で……金なども銀行や郵便局には預けずに、残らず現金にして、どこかにしまつておく……どこに隠しているかは妻君にも話さないという変り方だつたそうです。……ただその妻君というのが、ソレ者しゃ上りらしい挨拶上手で、亭主の引きまわしがよかつたために、やつと人気をつないでいたという事ですが……」

「なる程。そんな事で、とにかくきんしつあいわ琴瑟相和していた訳ですな」

「そうです……ところが、その甥の当九郎という青年が実松家に  
入り込むようになる、その夫婦仲が、どうも面白くななくなつた  
そうです。……これは品夫が生れる前から、長いこと雇われてい  
たお磯という婆さんの話ですが、何故かわからないけれども源次  
郎氏の当九郎に対する愛情というものは吾が兎わ以上こだつたそうで、  
当九郎に対するアタリが悪いと云つては、いつも品夫の母親を叱  
つたものだそうです」

「ハハア……一種の変態ですかな」

「そうだつたかも知れませんが……とにかく今までに無い夫婦喧嘩  
が、そんな事で時々起るようになったようですが、そのうちに丁  
度今から二十年前ぜんの事……品夫の母親が、品夫を生み落したまま

産褥熱<sup>さんじよくねつ</sup>で死ぬと間もなく、甥の当九郎が又、何の理由も無し

に、叔父の源次郎氏と私の養父<sup>ちち</sup>へ宛てて、亜米利加<sup>アメリカ</sup>へ行くという

置き手紙をしたまま、行方不明になってしまったものだそうです」

「ハハア。成る程……ところでその甥はホントウに亜米利加<sup>アメリカ</sup>へ行

つたのでしうか」

「サア……それが疑問の中心なので、その筋では、これが当九郎の叔父殺しの前提だと睨<sup>にら</sup>んでいたそうですが」

「成る程……尤も至極<sup>もつと</sup>な疑問ですナ」

「……とにかく事件は、その甥が家出してから、三箇月ばかり経つた後<sup>のち</sup>に……明治四十一年の三月の中旬でしたかに起つたものだ  
 そうで……源次郎氏は妻君に死に別れた上に、可愛がつっていた甥

にまで見棄てられて、赤ん坊の品夫と、お磯婆さんの三人切りになつたので、多少自棄<sup>やけ</sup>気味もあつたのでしよう。それから後<sup>のち</sup>暫くの間、殺生は無論の事、本職の獣医の方も放<sup>ほ</sup>つたらかしにして、毎日のようにK市の遊廓<sup>い</sup>に入り浸<sup>びた</sup>つたものだそうで、お磯婆さんや、養父<sup>ちち</sup>の玄洋が泣いて諫<sup>いさ</sup>めても、頑として聴き入れなかつたという事です」

「……いかにも……。そんな性格の人は氣の狭いものですからね。ほかに仕様がなかつたのでしよう」

「ところがです……。ところが、その三月の何日とかは、ちようど今日のような大雪が降つた揚句<sup>あげく</sup>だつたそうですが、その夕方の事、真赤に酔つ払つた源次郎氏が雪だらけの姿で、久し振りに自分の

家に帰って来ると、茶漬を二三杯掻き込んだまま、お磯が敷いた寝床にもぐり込んでグーグーと眠ってしまったそうです」

「話も何もせずにですか」

「無論、寝るが寝るまで一言も口を利かなかったそうです。これはいつもの事だったそうで……ですからお磯婆さんも別に怪しまなかつたばかりでなく、久し振りに枕を高くして品夫と添寝そいねをしたのだそうですが、あくる朝眼を醒ましてみると源次郎氏の姿が見えない。蒲団ふとんは藻抜もぬけの空からになつてゐるし、台所の戸口が一パイに開け放されて月あかりが映さしているのです、どこに行つたのか知らんと家の内うち外そとを見まわつたが、出て行つたあとで又、雪が降つたらしく、足跡も何も見えなかつた。それから押入れを開け

てみると、自慢のレミントンの二連銃と一緒に、狩やまゆきの道具が消え失せている。台所を覗いてみると、冷ひやめし飯を弁当に詰めて行った形跡があるという訳で、初めて狩かりに行つた事がわかつたのだそうです」

「……へエ……どうしてそう突然に狩かりに出かけたのでしよう」

「それがです。それがやはり甥の当九郎が誘おびき出したのだ……という説もあつたそうですが、しかし一方に源次郎氏はいつでも雪さえ見れば山に出かける習慣があつたので、この時も珍らしい大雪を見かけて堪たまらなくなつて出かけたんだらう……という意見の方が有力だつたそうです。……一方には又、そうした習慣があるのを当九郎も知つていたので、そこを狙つて仕事をしたんだらう

という説もあったそうですが、何しろ本人が唾おしに近いくらい無口な性質たちだったので、何一つわからず仕舞じまいになった訳ですが」

「その前に手紙か何か来た形跡は無かったでしょうか……甥甥の当九郎から……」

「お磯の記憶によると無かったそうです。……あとで家探やさがしまでしてみたそうですが……」

「……成る程。それから……」

「それから先は頗すこぶる簡単です。あのS岳峠いっぼんえのきの一本榎ほんえのきという平地いらの一角に在る二丈ばかりの崖から、谷川に墜おちて死んでいる実松氏の屍したい体を、夜が明けてから通りかかった兎追いの学生連中が発見して、村の駐在所に報告したので、大騒さわぎになったものだそ

うで……死因は谷川に墜ちた際に、岩角で後頭部を砕いたため、外には些<sup>すこ</sup>しも異状を認められなかったそうです。これはその屍体を診察した養父<sup>ちち</sup>の話ですがね……」

「成る程……しかし屍体以外には……」

「屍体以外には、ポケツトの中に油紙に包んだ巻煙草<sup>まきたばこ</sup>の袋と、

マツチと、焼いた鯛<sup>すめ</sup>が一枚這入っていたそうで、弁当箱の中味や、

水筒の酒も減っていないかったです。……それからもう一つ胴

巻の中から、二円何十銭入りの墓<sup>がまぐち</sup>口が一個出て来たそうですが、

それが天にも地にも実松家の最後の財産だったそうで、源次郎氏がどこにか隠していた筈の現金は、あとかたもなく消え失せていたそうです。……尤もこれは事件後に村外れに在った源次郎氏の

自宅を土台石まで引っくり返して調べた結果、判明した事実だそうですねが……」

「成る程……それで殺人の動機が成立した訳ですね」

「そうなんです。尤もお金の多寡たかはハッキリわかりませんがね……それから、もう一つ重要なのは、屍体の左手にシツカリと握っていたレミントンの二連銃の中に、発射したままの散弾やつきよの薬莖うが二発とも残っていた事だそうですね」

「ハハア……詰め換えないままにですな」

「そうですね。ほかの弾丸たまは、弾丸帯たまおびにキチンと並んでいて、一発も撃った形跡が無いし、弁当や水筒にも手がつけてないところを見ると、源次郎氏は、あの一本榎たいらの平地へ登り着くと間もなく、

何かに向つて二発の散弾を発射した。そうして後を詰めかえる間もなく谷川に転げ落ちて死んだものらしいと云うのです」

「へー……その辺がどうも可笑おかしいようすな」

「おかしいんです……源次郎氏は、今もお話した通りあの辺の案内ならトテモ詳しい筈ですからね。おまけに月夜の雪の中ですから、足場は明るいにきまつているし、余程の強敵に出会つて狼ろうば狽いでもしなければ、そんな目に会う筈は無いと云うのです」

「いかにも……その考えは間違ひ無さそうすな」

「僕にもそう思えるのです。しかし何しろ、その屍体の上には、岩と一ひと続きに、雪がまん丸く積つていた位で、附近には何の足跡も無いために、犯人の手がかりが発見出来なくて困つたそうで

す」

「そうですねえ。あとから雪が降らなかつたら何かしら面白いことが発見出来たかも知れませんが……」

「そうですね。尤も雪というものは人間じんげんの足跡から先に消え初めるものだ。と村の猟師が云つたとかいうので、雪解けを待つて今一度、現場附近を調べたそうですが、源次郎氏が通る前にS岳峠を越えた者は一人や二人じゃなかつたらしいので……おまけに現場附近は、屍体を発見した学生連に踏み荒されているので、沢山の足跡が出るには出たそうですが、いよいよ見当が附かなくなるばかりだつたそうですね」

「……すると……つまりその搜索の結果は無効だつたのですね」

「ええ……全然得るところ無しで、K町の新聞が盛んに警察の無能をタタイたものだそうです。……しかしそのうちに乳飲児の品夫が、お磯婆さんと一緒に此家に引き取られて来るし、仮埋葬になっていた実松源次郎氏の遺骸も、正式に葬儀が行われるので、事件は一先ず落着の形になったらしいのです。そうして色んな噂が立ったり消えたりしているうちに二十年の歳月が流れて今日に到った訳で……いわば品夫は、そうした二十年前の惨劇がこの村に生み残した、唯一の記念と云つてもいい身の上なんです」  
こう云つて唾を嚙み込んだ健策の眉の間には、流石に一抹の悲痛の色が流れた。

「なるほど……それでは村の人が色んな噂を立てる筈ですね」

と黒木も憂鬱にうなずいた。けれどもそのうちに健策は、又も昂奮こうふんして来たらしく、心持顔を赤めながら語気を強めて云った。「しかし誰が何と云つても、僕等二人の事は養父ちちが決定きめて行つた事ですから、絶対に動かす事は出来ない訳です……今更村の者の噂だの、親類の蔭口だのを問題にしちや、養父ちちの位牌に対して相済みませんし、第一品夫自身がトテモ可哀想なものになるのです。彼女あれの味方になつていた養父ちちもお磯婆さんも死んでしまつて、今では全くの一人ぼっちになつていますからね」

「御尤ごもつともです」

と黒木は又も深い溜息をしながらうなずいた。そうして気を換えるように云つた。

「……ところで……これはお尋ねする迄も無い事ですが、品夫さんは実のお父様が亡くなられた時の事をスツカリ聞いておいでになるでしょうね」

「それは無論です。うちの養父母おやたちや、お磯婆さんから飽きる程繰り返して聞かされているでしょうし、又、村の者の噂や何かも直接間接に耳にしている筈ですから、恐らく誰よりも詳しく知っているでしょう。……とにもかくにも復讐をするという位ですからね……ハハハハ……」

「いかにも……しかしその復讐をされるといふのは……どんな手段を取られるおつもりなのでしょう……」

「さあ……そこ迄は聞いていませんがね。アンマリ馬鹿馬鹿しい

話ですから……それよりも、そんな事を云い出す品夫の気もちが、第一わからなくて困っているんです……ですから、こんな内輪うちわば話なしをお打ち明けした訳なんです……」

「……成る程……」

と黒木は火鉢の灰を凝視みつめたままうなずいた。そうして暫しばらく何か考えているようであったが、やがて静かに顔をあげると、依然として遠慮勝ちに問うた。

「それから……これも余計な差し出口ですが、品夫さんの戸籍こせきと膳本うほんは取って御覧になりましたか？」

「ハア。養父ちちが取っておいたのが一枚ありますが、実松源次郎の長女品夫と在るだけで、全く身よりたよりの無い孤児です。……」

三四年前ぜんにわざわざC県まで人を遣つて調べた事もあるそうですが、ずっと前から故郷に親戚が一人も居なくなっていたのは事実で、当九郎の両親の名前も知っている者が居ない位だったそうです……しかし、それがこの事件と何か関係があるのですか？」

「……イヤ……関係がある……という訳でもないのですが……」

黒木は何故か言葉尻を濁にごすと、前よりも一層憂鬱な態度で、腕を深く組みながら考え込んだ。その黒眼鏡の下の無表情な顔色を、健策はさり気なく眺めていたが、やがて片膝を抱え上げながら、所在なさそうにゆすぶり初めた。

「黒木さん。遠慮なさらなくともいいんですよ。……貴方あなたとは、もう久しい間御懇意に願っていますし、ちようど品夫の父親の二

十一回忌に当る年に、こんな大雪が降るのも、何かの因縁いんねんだろうと思つてコンなお話をするんですからね……御腹蔵の無いところを打ち明けて下さった方が、却かえつて功德くどくになるんですよ……ハハハハハ

こう云ううちに健策は全く昂奮が静まつたらしくノンビリした顔色になつた。同時にいくらか話に飽きが来たらしく、あおむいて小さな欠伸あくびを出しかけた。しかし黒木は依然として表情を動かさなかつた。なおも腕を深く組んで何事か考えまわしているらしかったが、そのうちに両手で眼鏡をかけ直しながら、軽い溜息ためいきと一緒につぶやいた。

「サア……それをお話していいか……わかるか……」

「ハハハハハ。お話出来なければ無理に伺わなくともいいんですがね。……元来これは僕等二人の間に、秘密にしておくべき問題なんですから……しかし、くどいようですが、たとい品夫がドンナ身の上の女であろうとも、二人を結びつけている死人の意志は、絶対に動かす事が出来ない訳ですからね。よしんば品夫のためにこの家が滅亡するような事があつても、それが故人の希望なんですから、その辺の御心配は御無用ですよ……ただ参考のために承つておくに過ぎないのですからね。ハハハハハ、こう云つちや失礼かも知れませんが……」

健策は相手を皮肉るでもなくこう云つて笑うと、思い切つて大きな欠伸あくびを一つした。硝子窓ガラス越しにチラチラ光る綿雪を見遣りな

がら……。

「……成る程……それでは……私の意見かんがえを……申してみますが……」

黒木はやつと決心したらしく、窮屈そうにこう云いながら、火鉢の横に転がっている大きな湯呑を取り上げて白湯ゆを注いだ。すると健策もそれに倣ならって、長椅子の下から硝子コップを取り上げた。

二人の間には又も新らしい談話気分が漲みなぎった。健策はフウフウと湯気を吹きながら、剽ひょうきん軽な調子で云った。

「……どうか願います。品夫の一生の浮沈にかかわる事ですから……」

しかし黒木はどこまでも真面目な、無表情のうちにならずいた。湯呑を片わきへ置きながら……。

「イヤ……重々御尤もです。それじや、お話できるだけ、してみましようが、その前にもう一つお尋ねしたい事がありますので……」

健策もコップを畳の上に置きつつ、気軽にうなずいた。

「ハア。何なりと……」

「……イヤ。ほかでもありません。つまり品夫さんのお父様に関する今のお話ですがね……そのお父様が変死された事について、品夫さんは矢張り御自分一個の観察を下してお在いでになるでしょうね」

「……観察というのは……」

「……そのお父さまの変死が、何故に他殺に相違ないか……とい  
うような事です」

「それは相当考えているでしょう。探偵小説好きですからね……  
しかしそんな事を面と向って尋ねた事は一度もありませんよ。も  
う過ぎ去ってしまった事ですし、そんな事を訊いて又泣き出され  
でもすると面倒ですから……」

「ハハア。成る程……それじゃ貴方は、貴方御自身だけで別の解  
釈を下しておられる訳ですナ」

「イヤ。解釈を下すという程でもありませんが、僕だけの常識で  
説明をつけておるので、手ツ取り早く云うと養父ちちと同じ意見なの

です。……要するに最小限度のところ、実松源次郎氏の変死を自殺、もしくは過失と認むべき点はどこにも無い……他殺に相違無いという事に就いては、疑う余地が無いと信じているのですが……

「……では玄洋先生も初めから、実松氏の甥の所業しわざと睨んでおられた訳ですな」

「まあそうなんです。しかし、これは要するに、今お話したような事実を土台にして、色々と推量をした結果、最後に生まれた結論に過ぎないので、元来が迷宮式の事件なのですから、あなたの方からモット有力な、根拠のある御意見が出たら、その方に頭を下げようと思っっているのですが」

「イヤ。根拠と云われると困るのですが……有ありてい体に白状しますと、私の意見というのはタツタ今、あなたのお話を聞いているうちに、私の第六感が感じた判断に過ぎないのですからね」

「ホウ……タツタ今……第六感……」

と健策は眼を丸くして腮あごを撫でた。黒木は心こころもち持得意らしくうなずいた。

「そうです。私は永年、生命いのちがけの海上生活をやって来たものですから、事件と直面した一刹那に受ける第六感、もしくは直感とでも申しますか……そんなものばかりで物事を解決して行く習慣が付いておりますので……この事件なぞも、そんなに長い事未解決になつてゐる以上、その手で判断するよりほかに方法が無いと

思うのですが」

「……成る程……素敵ですナ……」

「ええ。あまり素敵でもないかも知れませんが……しかし、それでも、そうした私一流の判断でこの事件を解釈して行きますと、只今の品夫さんの復讐論などは、全然無意義なものになってしまふのです。あなたの御注文通りにね……」

「エツ。全然無意味……僕の注文通りに……」

健策は一寸の間<sup>ちよつと</sup>啞然<sup>まあぜん</sup>となった。そうして眼をパチパチさせて面喰っていたが、まもなく落ち付きを取り返すと、テレ隠しらしく、両膝を無造作に抱え直してゆすぶり始めた。又も思い切つて赤面しながら……。

「ハハア。イヨイヨ素敵ですな。是非聴かして下さい……その第六感というのを……」

黒木は赤ん坊をあやすように、鷹揚おうようにうなずいた。

「無論お話しします。……しかしその前に、先ず今のような第六感を受けなかった前の、私の平凡な常識判断から申しますと、元来かような迷宮式の事件というものは、色々な考え方があつたもので、それを或る一方からばかり見ているために、判断が中心を外れて来て、自然ひとりに迷宮を作るような事になるのだと思います……殊に人の噂とか、当局の眼とかいうものは、物事に疑いをかける癖が付いているので、色々な出来事の一ツ一ツが、何となくその疑いの方向に誇張して考えられたり無理に結び付けられたり

し易い。そのためにいよいよ迷宮を深くして行き勝ちなものだと  
思いますがね」

「賛成ですね。成る程……」

「ところで、こう申上げては失礼かも知れませんが、あなたの御お  
養父様のこの事件に対する判断や、御記憶なぞいうものは、どこ  
までも人情的……もしくは常識的になっておりますので……あな  
たも主としてその御養父様からお聞きになったお話を骨子として  
判断をなすった結果、同じ結論に到着されたものと思いますが……  
……」

「その通りです……それで……」

「それでそのお話を、あなたから間接に承わったところによって

考えまわしてみますと、この事件の内容はあらかた三つの出来事に分解する事が出来ると思うのです」

「成る程……そこまでは僕等の考えと一致しているようです」

「……そうですか。それでは説明する迄も無いかも知れませんが、第一は単純な実松源次郎氏の墜死そのものです」

「いかにも……」

「その次は源次郎氏の貯金の紛失事件で、今一つはその甥の行方不明事件と、この三つが固まり合ったのが一つの事件として判断されているのでしよう」

「敬服です。いよいよ敬服です」

「……ところで、この三つの事件を組み合わせて、一つの事件と

して観察してみますと、かなり恐ろしい事件に見えますね。……つまりその悪人の何とかいう青年が、大恩ある品夫さんのお父さんを、山の上で惨殺して、財産を奪って逃げた事になるので、この事件は、そうした残忍非道な性格によつて行われた、計画的な犯行という事になるでしょう」

「全くその通りです。実松源次郎氏を殺さずとも、その恩義を忘れただけでも当九郎は大罪人だ……と養父ちちは云つておりました」

「ところがです……ここで今一つお尋ねしますが貴方は……貴方のお養父様とうでもおなじ事ですが、この三つの事件を別々に引き離してお考えになつた事は、ありませんか」

「……………」

健策は膝を抱えたまま頭を強く左右に振った。思いもかけぬ……という風に……。黒木は白い歯を露わして微笑した。

「……ハハア。おありにならない。多分そうだろうと思いました。それならば試しに、この事件の三つの要素を、一ツ一ツに分解して考えて御覧なさい。そんな有り触れた殺人事件なぞより数層倍恐ろしい……戦慄すべき出来事となつて、貴方がたの眼に映じて来はしまいかと思われのですが」

「……数層倍恐ろしい……」

「そうです……おわかりになりませんか」

「わかりません」

「ハハア。おわかりにならない……イヤ御尤もです。私の判断

の根拠というのは、今も申します通り、極めて非常識なものですからね……しかし或る程度までは常識で説明出来るのです。否……却つて私の考えの方が常識的ではないかと思われるのですが……

……

「ハハア……それはどういう……」

「……まず……この事件の犯人と目されている今の……エエ。何とかいいましたね。ソウソウ当九郎……その甥の行方不明と、この事件とが結びつけられているのは一応もつとも千万な事と考えられます……というのは、源次郎氏の妻君と、忠義な乳母のお磯とを除いた村の人間の中で、源次郎氏が金を隠している場所を発見する可能性が一番強いのは、誰でもない……その甥の当九郎と

いう事になるのですからね」

「いかにも……」

「……一方に叔父御おじごの源次郎氏は、変人の常として、存外、用心深いところもあるので、支那人のように全財産を胴巻か何かに入れて、夜も昼も身に着けておく習慣があつたかも知れない。それを又当九郎が推察したものとすると、その金を奪うためには是非とも源次郎氏を殺さなければならぬ事になるでしょう……」

「無論ですな……それは……」

「……そこで先ずその第一着手として、自分に嫌疑がかからぬように、アメリカ亜米利加に行くと呼して家出をした。それから相当の時日が経つた後のちに姿をかえながら、兇器たすきを携えて源次郎氏を附け狙つ



い取って、二円ながし入りの墓がまぐち口を故意に残して立ち去ったもの……と想像する事が出来るでしょう」

「……驚いた……全くその通りです。養父ちちの考えと一分一厘違いありません」

「そうですね……これが一番常識的な考え方で、前後を一貫した事実のすべてとピッタリ符合するのですからね」

「そうですね。それ以外に考えようは無いと思われているのですが」

「そうですね……しかしここで、今一步退いて別の方面から観察したら、どんなものでしょうか……つまりこの事件には、そのような犯人が全然居なかったとしたら、どんな事になるでしょうか」

「……エツ……犯人が居ない……」

「そうです。つまりその当九郎という甥が、この事件に結び付けられているのは、人々の想像に過ぎないとしたらどうでしょうか……実際と一致する想像は、よく正確な推理と混同され易いものですからね……甥の当九郎はホントウに青雲の志を懐いだいていたので、そのまま一直線に外国へ行つてしまつて、この方面には全然寄り附かなかつたとしたら……どうでしょうか……そんな事はあり得ないと云えましょうか」

「サア……それは……」

「……又……実松氏の貯金を無くしたのは誰でもない実松氏自身で、その金は遊興費か何かに費消されてしまったものとしたら、

どうでしょうか。そんな風には考えられぬでしょうか」

「……………」

「…………そういう風に三つの出来事をバラバラにして、一ツ一ツに平凡な出来事として考えて行く方が、この事件を計画的な殺人と考えるよりも却<sup>かえ</sup>つて常識的で、非小説的ではないでしょうか…………すなわち事実に近いと思われはしないでしょうか」

「……………そうすると……………」

と健策は眼を光らせながら、すこし狼狽したように身を乗り出した。

「そうすると何ですか……………実松氏が発射した二発の散弾は、やはり本当の獣<sup>けもの</sup>か何かを狙ったものなんですね」

「イヤ……そこなのです」

と黒木は反対に反り身そになつた。さも得意そうに白湯さゆを一口飲むと、悠々と舌なめずりをした。

「……私もそう考えたいのです。……が……そうばかりは考えられない別の理由わけがあるのです。実を云うとこれから先が私の本当の直感ですがね」

「……その直感というのは……」

と健策は益々身を乗り出した。同時に黒木はいよいよ反りそかえつて行つた。

「……手早く申しますと実松源次郎氏は、その払よあけ暁前の雪の中で、或る恐怖に襲われたのではないかと思われるのです」

「……或る恐怖……」

「さよう……つまり実際には居ない、或る怖るべき敵を、雪の中に認めて、その敵と闘うべく、二発の散弾を発射されたものではないかと考えられるのです。そうすれば一切の事実が何等の自然も無しに……」

「……チョット待って下さい」

と健策は片手をあげた。次第に不安げな表情にかわりながら……。

「その怖るべき敵と云われるものの正体は何ですか……たとえば一種の精神病的な幻覚みたようなものですか」

黒木はキツパリとうなずいた。

「さよう……その幻影は要するに、実松氏固有の脅迫きょうはく観念が生んだ、ある恐ろしいものの姿だったに違いありません。鳥だか、<sup>けもの</sup>獣だか、何だかわかりませんが……」

健策は愕然がくぜんとなった。何事か思い当たったらしく唾液つばを嘔み込み嘔み込み込みした。しかし黒木は構わずに話を続けた。

「実松氏はその幻影と闘うべくレミントンの火蓋を切られたのです。しかし、もとより実際に居ない敵なのですから、いくら散弾でも命中する気づかいはありません。敵は益々眼の前に肉迫して来ましたので、実松氏は恐怖の余り夢中になって逃げ出した……そうしてお話しのような奇禍あに遭われたのではなかったかと考えられるのです」

「ハハア……」

と健策はいよいよ不安らしくグツと唾液つばを嚙のみ込んだ。

「……しかしその証拠は……」

「……イヤ。証拠と云われると実に当惑するのですが……要するにこれは私の直感なのですから……しかし実松氏が、この甥の当九郎を愛しておられた程度が、普通の人情を超越していたらしい事実や、全財産を現金にして絶対秘密の場所に隠していたところなどを見ると、実松氏はどうしても、或る一種の超自然的な頭腦とらの持主としか思われないのです。従ってそうした脅迫觀念とらに囚われ易い……」

「……イヤ……解りました……」

こう云いながら相手の話を遮り止めた健策は、急に長椅子の上に居住居を正した。踏みはだけた膝の上に両肱を突張つて、二三度大きく唾を嚙み込むうちに、みるみる蒼白な顔になりながら、物凄い眼で相手を睨み付けた。唇をわななかせつつ肺腑を絞るような声を出した。

「……イヤ。よくわかりました。今まで全く気が付かずにいしましたが、貴方の御意見を聞いているうちに何もかも解つてしまいました。……貴方は実松氏の超常識的な性格から割り出して、当九郎の無罪を主張していられるようです。つまり実松氏は……品夫の父は元来、深刻な精神病的の素質を遺伝している、変態的な性格の所有者であつた。だから月の光りの強い、雪の真白い山の上

で、一種の幻覚錯覚に陥って、自分でも予期しない自殺同様の、  
非業ひごうの最期を遂とげたもの……と主張しておられるのでしよう」

「イヤ。ちよつとお待ち下さい」

と黒木が片手を揚げて制しかけた。健策の語気が、だんだん高  
まって来るのを怖れるかのように……。しかし健策はひるまな  
かつた。黒木と同時に片手を揚げながら、なおも身体からだを乗り出した。

「イヤ。お待ち下さい。待つて下さい。貴方は御存じないのです。  
そうした主張で、当九郎の無罪が証明出来るものと思つていられ  
るようですが、そうした説明ならば、僕の方が専門なのです。い  
いですか。……今お話のような事実を、有名なデビーヌ式の素質  
遺伝の原則と照し合わせると、却かえつて正反対の結論が生まれて来

るのですよ。……美青年当九郎は表面上柔和な人間に見えながら、その底には、やはり実松氏と同様の超自然的な性格を隠し持つていた……しかも大恩ある叔父を執念深く付け狙つて殺すというよ  
うな残忍冷酷を極めた、非良心的な先天性の所有者であり得た事  
が、科学的に証明されて来るのですよ。……いいですか……又、  
実松氏が極端な変人であると同時に、  
血ちなまぐさ腥せつしようい殺せつしよう生せいを唯一  
の趣味としていた因縁も、その血腥い殺生行為のアトで、異常な  
性的の昂奮を見せるという、変態的な性格も、その故郷の血族の  
絶滅している理由も……そうして現在の品夫が、二十年前ぜんの殺人  
犯人に凝視されているという脅迫観念や、復讐をしなければ止ま  
ぬというような偏執モノマニア狂式とらの空想に囚とらわれている原因も……何も

かもがこの事件の核心となつてゐるタツターツの事実によつて説明され得る……つまりT塚村の実松家は、ヒドイ精神病の系統であつたと……」

相手の悽愴<sup>せいそう</sup>たる語氣に吞まれて、急に赤くなり、又、青くなりつつ眼を睜<sup>みは</sup>つていた黒木は、この時ヤツとの事でヘドモド坐り直した。両手をあげて迸<sup>ほとばし</sup>り出る健策の言葉を押し止めた。

「……イヤ……お待ち……お待ち下さい。ソ……それは貴方の誤解です。私はただ品夫さんのお父さんの事だけを申しましたので……」

「……否<sup>いや</sup>……チツトも構いません。公然と僕達の結婚に反対されても構いません」

健策は断乎だんことした態度でこう云い切った。云い知れぬ昂奮に全身を震わせながら……。

「……たといドンナ事があるうとも、僕は品夫を殺さない決心ですから……品夫を見棄てる気は毛頭もうとう無いのですから、何でもハツキリ云って下さい。……実松一家は、そんな恐ろしい精神病の遺伝系統のために、その故郷で絶滅してしまっている。そうして僅わずかに残った一滴の血が、めぐりめぐって現在藤沢家を亡ぼすべく流れ込もうとしている。その一滴の血が……品夫だと云われるのですね」

「……………」

「藤沢家のためには、品夫を見殺しにした方が利益だと云われる

のですね……貴方は……」

「……………」

「……………」

二人は青い顔を見合わせたまま、石のように凝固してしまった。  
……ちようどその時に、扉ドアの外で何か倒れたような音がしたので  
…………。

二人はハツとしながら同時に立ち上った。扉ドアに近い健策が大急  
ぎで把ハンドル手を引くと扉ドアの外の暗いリノリウムの床に、白い服を着  
た品夫が横たわっていた。

健策は無言のままひざまず跪いて脈を取った。そうして強いて落ちつい  
た態度で、傍に突立っている黒木の顔を見上げると、如何いかにも苦

々しげに頭を一つ下げた。

「……すみませんが……診察室の扉とを開けてくれませんか……」

その夜の三時をすこし廻った頃であつた。

品夫は作りつけの人形のように伏せていた長い睫まつげを、静かに二

三度上うえした下に動かすと、パツチリと眼を見開いた。そうして黒い

瞳うつろを空虚のように瞠みはりながら、仄ほのくら暗い座敷の天井板を永い事見

つめていた。

それから瞬まばたき一つせず、頭をソロソロと左右に傾けて、白いず

くめの寝具と、解とかし流されたまま、枕の左右に乱れかかっている

自分の髪かみのけ毛を見た。それから、黒い風呂敷を冠せられている

枕元の電気スタンド……床の間に自分が生いけた水仙の花……その横の床柱に、白い診察着のまま倚よりかかって腕を組んで睡いっている健策の顔……その前の桐の丸火鉢の上で、仄ほのかに湯気を吐いている鉄瓶……その蔭に搔かき巻まきを冠かつたまま突伏ぶつぷくしている看護婦……そんなものの薄暗い姿を一ツ一ツに見まわした彼女は、その表情をすこしも動かさないまま、又、もとの通りにおおのけになつて、しずかに眼を閉じて行つた。

室の中は又も、雪の夜の静寂に歸つた。シンシンと鳴る鉄瓶の音と、スヤスヤという看護婦の寝息と、雨戸の外でチヨロチヨロと樋とを伝いい落ちる雪水の音ばかりになつた。

しかし品夫は、ほんとうに眠つたのではなかつた。やがて眼を

閉じたまま、唇の左右に何ともいえない冷たい微笑を浮かべたと  
思うと、瞼をウツスリと開きながら、ソロソロと起き上った。両  
手を前にさし伸べて……手探りをするように身体からだをうねうねと  
らして……中心を取りかねているようであつたが、そのうちに両  
手で夜具を押えつけると、スツクリと寢床の上に立ち上った。

彼女はいつもねまきがじゅばんにしている、十六七歳時代の紅友べにゆうぜん禪の長  
襦袢がじゅばんを着せられていた。その上から紫扱しんぎ帯の古ぼけたのが一す  
じ、グルグルと巻き付けてあるきりであつたが、そのふくらんだ  
自分の胸に取り縋すがるように、両方の掌てのひらをシツカリと押し当てて、  
素足のまま寢床を降りると、スラスラと畳の上を渡つて、芭蕉ばしやう  
布張りの襖ふすまに手をかけた。その時に、畳に引きはえた襦袢すその裾

が、枕元に近いお盆の上の注射器に触れてカラカラと音を立てた。それにつれて、睡っていた健策が、すこしばかり大きな寝息をしたが、品夫は別に見向きもせず、足を止めようともしなかつた。

芭蕉布の襖が音もなく開くと、寒い風が一しきりスースーと流れ込んで来た。しかし品夫は、そのあとを閉める気も無いらしく、次の間の障子を今一つスーと開くと、そのまま明るい廊下へ出た。その廊下の一方は硝子<sup>ガラス</sup>雨戸になっていて、黒々と拭き込んだ板張りにも、外のお庭の雪の植込みの上にも、タツタ今晴れ渡ったばかりのニツケル色の空から、スバラシイ満月の光りがギラギラとふるえ落ちていたが、品夫は、やはり、そんな光景には眼もくれなかつた。<sup>あたか</sup>恰も何者かに導かれるように、半開きの瞳の前の冷た

い空間を凝視しつつ、一直線に長い廊下を渡りつくしたが、その行き止まりに在る青ペンキ塗りの扉ドアを開いて、薬局の廊下に這入ると、真暗なりノリウムの上を、やはり一直線に進んだらしく、間もなく突き当りの扉ドアを押す音がした……と……やがて診察室の中央に吊るされた電球が、眼も眩くらむほど輝き出した。

暖かい奥座敷から、急に氷点以下の寒い処に出て来たせいとか、品夫の血色は全く無くなっていた。顔も手足も、それこそ雪のように真白く透きとおっていたが、それが黒い髪を長々とうしろへ垂らして、燃え立つような長襦袢を裾あらも露あわに引きはえつつ、青白い光線をふり仰いで眼を細くした姿は淫みだりがましいと云おうか、神こうごう々しいと形容しようか。人間の眼に触れてはならぬ妖なまめか艶かし

さの極み……そのものの姿であつた。

しかし、雪に鎖とぎされた藤沢病院の、深夜の診察室に、こんな姿が立ち現われていようことは、誰一人思い及び得よう筈が無かつた。すべては零下何度の空気に包まれて、シンカンと寝静まつていた。そのような静けさの中にスツクリと立ち止まつた品夫は、いかにも眩まぶしそうなウツスリした眼つきで、そこいらを一渡り見まわしていたが、間もなく室へやの隅に置いてある四方硝子張りの戸棚に眼をつけると、ヒタヒタと歩み寄つて、重たい硝子戸を半分ほど開いた。そこから白い片手を突込んで、方形の瀬戸引きバツトに並んでいる数十のメスをあれかこれかと選んでいたが、やがてそのバツトの外に、タツタ一つ投げ出してある大型の一本を取

り上げた。

それは小さい薙なぎ刀なたの形をした薄ッペラなもので、普通の外科には必要の無い、屍体解剖用の円刃刀えんじんとうと称する、一番大きいメスであつた。この病院では何か外の目的に使われているらしく、柄えの近くには黒い銹さびの痕跡あとさえ見えていたが、彼女はそれを右手の指の中に、逆手さかてにシツカリと握り込むと、背後うしろの青白い光線に翳かげしながら二三度空中に振りまわして、キラキラと小さな稲妻こどもを閃ひらめかした。それを見上げながら品夫はニツコリと、小児こどものような無邪気な微笑を浮かべたが、そのままメスを右手に捧げて、左手で両袖を抱えつつ、開いたままの扉ドアの間から、又もリノリウムの廊下に迂すべり出た……と……今度は左に折れて、泉水の上から、

病室の方へ抜ける渡わた殿どのの薄暗がりを、ホノボノと足あし探さぐりにして、第一の横廊下を左に折れ曲つたが、やがて、その行き詰まりに在る特等病室の前に来た。そうして、やはり何の躊ちゆう躇ちよもなく真しん鍬ちゆうのノツブを引いた。

十燭しよくの電燈でんきに照らされた鉄の寝台ベッドの上には、白い蒲団を頭から冠つている人間の姿がムツクリと浮き上つていた。その上にメスを捧げたまま、品夫は何かしらジツと考え込んでいるようであったが、やがて上の蒲団ベッドを容赦なく引き除のけると、髪かみ毛のけを濛もうと空中に渦巻かせて、寝床ベッドの中に倒れ込むようにメスを振りおろした。その枕元から、白い散薬の包紙が一枚、ヒラヒラと床の上に舞い落ちた。

「ムム……オオツ……」と夢のような叫び声がして、白いタオル寝巻に包まれた、青黒い巨大な肉体が起き上りかけた。それはイガ栗頭の黒木繁であったが、毛ムクジャラの両腕を引き曲げて、寝巻の胸に沈み込んだメスの柄を、品夫の右腕と一緒に無手と掴んだ。

……しかし、それをドウしようというような力はもう無かった。血走った白眼を剥き出して、相手の顔をクワツと覗き込んだが、乱れた髪の毛の中を一眼見ると、そのまま両眼をシツカリと閉じて、シーツの上へのけぞった。

「……むむツ……チ……畜生ツ。もう……来……た……か……」

と切れ切れに叫びかけたが、その言葉尻にはヘンテコな節が付

いて、はやり流行唄の末尾のように意味を成さないまま、わななきふるえつつ消え失せた……と思う間もなく、喰い縛った齒の間からこがらし風のような音を立てて、泡まじりの血を噴き出した。

しかし品夫は依然として手を弛ゆるめなかつた。相手の腕の力が抜けて来れば来るほど、スブスブスブと深くメスを刺し込んで行つた。そうして大おおなみ浪を打つ患者の白いタオル寝巻の胸に、ムクムクと散り拡がって行く血の色を楽しむかのように、紅友禪の長襦袢の袖を、左手でだんだん高くまくり上げて、白い、透きとおるような二の腕を、カーパイにしなわせながら、ジロリジロリと前後左右を見まわしていたが、やがて眼の前の逞ましい胸が、一しきりモリモリモリモリと音を立てて反そりかえつて来たと思う間も

なく、底深い、ちなまぐさ血ち腥ない溜息と一所に、自然自然とピシャンコ  
 になつて行くのを見ると品夫は、白い唇をシツカリと噛み締めた  
 まま眼を細くして、メスを握り締めている自分の手首を凝視した。  
 大きく、静かに、最後の呼吸を波打たせる相手の胸に、調子を合  
 わせるかのように、彼女自身の呼吸を深く、深く、ゆるやかに張  
 り拡げて行つた。そうして相手の呼吸が全く絶えると同時に、彼  
 女自身もピッタリと呼吸を止めて、彫像のように動かなくなつた。

「……品夫ツ……」

という雷のような声が、廊下の方から飛び込んで来たのはその  
 時であつた。

ハツとした品夫は、一瞬間に身を退ひいた。おびただ夥しい髪かみのけ毛けを颯さっと

背後うしろにはね除のけて、メスを握った右手を高く振り上げかけたが、白い服のまま仁王立ちになっている健策の真青な、引き歪ゆがめられた顔を眼の前に見ると、急に身を反そらして高らかに笑い出した。

「……ホホホホホホ。ホホホホあなた見ていらつしたの……ホホホホホホ。ステキだったでしょう……妾わたし……とうとう讐敵かたきを討つたのよ……」

品夫の手から辻すべり落ちたメスが、床の上に垂直に突立った。同時に気が弛ゆるんだらしくグツタリとなった品夫は、両頬を真赤に染めて羞恥はにかみながら、健策の胸にしなだれかかった。血だらけの両手を白い診察服の襟にまわしながら、火のような眼をしてふり仰いだ。

「……………ネ……………わかったでしょう……………。もう貴方と……………でも……………  
……………いいのよ……………」

# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年1月22日第1刷発行

底本の親本：「冗談に殺す」春陽堂

1933（昭和8）年5月15日発行

入力：柴田卓治

校正：ちはる

2000年10月11日公開

2006年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 復讐

夢野久作

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>